

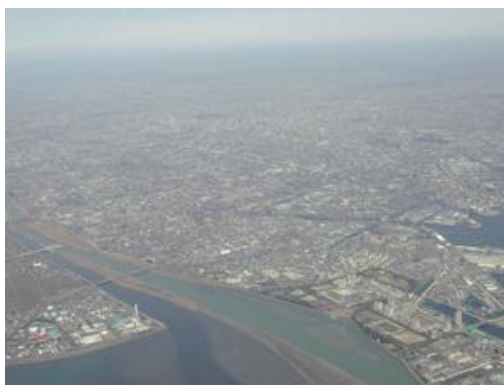
(2) - 3) ④干潟の学校の取組（名古屋市 藤前干潟を守る会）

干潟の保全と共に定期的に「干潟の学校」を開催し、環境教育に利用すると共に、各種リーフレットやパンフレット、学習資料を作成し環境保全のための普及啓発活動に役立っている。また干潟を軸に国際的なネットワークへの参加を促進している。

a. 取組の背景と経緯

1950年代以前には伊勢湾最奥部は広大な干潟が広がっていたが、その後の港湾開発・工場用地・農業用地の埋め立て開発によりほとんどが消失した。この地域に残された藤前干潟もゴミ処分場として開発計画が浮上した。

しかし多様な生きものの生息地でありシギ・チドリ類やオナガガモ・スズガモのカモ類などの渡り鳥の飛来地でもある藤前干潟保全の動きが住民団体や環境庁（当時）を中心におこり、埋め立て計画は撤回され、新たな保全と活用の取組が開始された。



左図:藤前干潟の位置、右写真:干潟の航空写真。市街地がすぐそばまで迫る(名古屋市ホームページより)

b. 活用方法

■環境教育の場としての活用－「干潟の学校」の取組

干潟環境を利用して、「干潟の学校－体感プログラム－」が年間を通じて開催されている。「ヨシはらをあそぼう」「お月見会」「潮だまり観察会」「ナイトウォッチング」「カモかもウォッチング&足型とり」「海苔を作ろう」など干潟環境や季節に応じた多様なプログラムが実施されている。

また名古屋市では、藤前干潟を知ってもらうためのイベントを実施したり、小中学生を対象としたリーフレットを作成し配布している。また、干潟の重要性や魅力を学ぶための環境学習プログラムを作成し実施している。

■世界とのネットワーク形成の軸として

藤前干潟をテーマにして、ラムサール条約への加盟やシギ・チドリ類ネットワークなど国際的条約や国際的ネットワークへ参加。世界との情報交流を進めると共に、地域での環境保全活動・活用の促進に役立っている

c. 保全活動と生きものへの効果

藤前干潟でのゴミ処分場計画の撤回は、ゴミの増大に悩む名古屋市のゴミ収集制度見直しにもつながった。また2002年にラムサール条約湿地への登録が実現。また藤前干潟協議会が設立され、保全・活用

に向けた取組が促進している。

干潟には2万羽を越える水鳥が定期的に飛来するなど、生物多様性が維持されている。



写真：藤前干潟に飛来する水鳥たち（名古屋市ホームページより）